

# 明治二年における佐賀藩藩政改革の一考察

——鍋島市佑の動向を中心として——

長 野 暹

## 目 次

- 一 はじめに
- 二 藩治規約制定過程期の状況
- 三 藩知事制下の状況
- 四 むすびにかえて

## 一 はじめに

戊辰戦争によって、維新政権の基盤が軍事的に確立したが、これに応じて諸藩は維新政権が打ち出す諸指令に基  
本的には順応してゆかざるをえなくなった。中央集権体制を強化するために行われた政策の中に藩治職制の制定に  
よる藩政改革の推進があつた。藩治職制によって、統一的な藩制の構築が目指され、維新政権の指令が推進できる

体制の形成が進められたが、藩治職制による藩政改革は容易ではなかった。特に戊辰戦争において維新政権側に属して参戦した諸藩では、征討軍と残留者との矛盾が強く複雑な様相を呈した。<sup>(2)</sup>

佐賀藩においては、旧藩主鍋島直正の帰藩によってようやく藩政改革が進行し、藩治職制に沿った藩治規約が制定される。<sup>(3)</sup>これを明治二年の動向の第一段階とすれば、第二段階は版籍奉還による藩知事制下での改革である。<sup>(4)</sup>藩知事制は形式的には、旧藩主が中央政府の官僚機構の一環をなすものであり、独自の統治権の縮小であるが、旧藩主を始めとして、家臣団もこの意義をどの程度理解していたかがある。藩体制の解体ということからすれば、藩知事体制は決定的な作用を及ぼしたが、現実に進化する諸改革に藩士がどのような対応を示したかの分析が肝要になる。藩治規約制定過程とその政策展開の説明が第一段階の問題点であるとすれば、第二段階においては、藩知事体制下での第一段階との相違点を検討することであろう。これは藩主権の存在とそれに基づく藩政という事態と、維新政権の官僚機構に組み込まれた旧藩主が領内における絶対的統治権ではなく、維新政府の行政指揮の下での支配に組みこまれた事態との相違の検討となり、それは中央集権体制の確立を急ぐ維新政府内部の藩体制解体推進派の存立基盤の解明に繋がるものがある。

ところで、本稿では、前記課題に対して、佐賀藩上級家臣である鍋島市佑家の「家政日記」<sup>(5)</sup>を通じての分析という手法で検討してみよう。これは一つには、藩体制を支え藩政運営の主体をなしてきた上士層の動向を考察し、明治二年における諸改革が生み出す矛盾を上士層について説明するためであり、二つには、維新政権の権力基盤が藩内においては、どの層において見いだされるかを検討するためである。これらは藩体制解体において、明治二年という時期の位置づけにも関連することであろう。

注(1) 下山三郎『近代天皇制研究序説』(岩波書店、一九七六年)、中村哲「領主制の解体と土地改革」(『講座日本歴史』7、近代Ⅰ、東京大学出版会、一九八五年所収)、佐藤誠朗「維新政権論」(『講座日本近世史』第一〇巻、有斐閣、一九八五年)、

同『近代天皇制成立史の研究』(三一書房、一九八七年)。

(2) 佐賀藩支藩蓮池藩の状況については、拙稿「肥前蓮池藩の体制とその解体過程」(1)、(2)〔佐賀大学「法経論集」一〇巻一  
号、二号〕

(3) 杉谷明『明治前期地方制度史研究』(佐賀女子短期大学研究叢書第一巻、一九六七年)一一四六頁、『鍋島直正公伝』第六  
篇(大正九年)三二四―三三一頁。

(4) 羽賀祥二「領知権の解体と『民政』」(『日本史研究』二八九号、一九八六年)

(5) 「城原鍋島家日記」(佐賀県立図書館蔵、以下特に記さない限り、史料は同館蔵のものである)。

## 二 藩治規約制定過程期の状況

鍋島市佑家は、「納富家系図」<sup>(1)</sup>によれば、納富栄房の代は「隆信公御代三奉行之一人也、知行藤津郡納富分村之三  
根郡下津毛村其外都合七百余町」とある。龍造寺隆信の重臣であつたことが記されている。「寛永五年惣着到」では  
「知行千四百貳拾貳石、切米五百斛」とある。物成知行高に換算すれば一二二一石であり、知行高の大きさからす  
れば藩内では二一番目に位置する。栄房―信景―家輔―長昭と続くが、長昭については前記系図によれば「初納富  
又次郎、此時御名字拝領、実龍造寺阿波守四男、承応三年午七月朔日也」とあり、長昭の代に鍋島氏を称するよう  
になる。「御国惣万帳」<sup>(3)</sup>では物成知行一二二五石になり、「鍋島主水与物頭鍵之衆東御門近所」とあり、鍋島主水組  
に属し物頭を勤めている。明暦二年の「泰盛院様御印帳」では物成知行一〇八〇石とある。「元禄八年着到」では物  
成知行一〇八〇石とあり、明暦二年の知行高との変化はない。しかし、長昭を継いだ正章の代になると「有無調法  
而牢人」<sup>(4)</sup>と記されており、元禄十三年には牢人の身分となるが、嫡子の長寛が「被召出半地六百石拝領」<sup>(5)</sup>となり、  
再び取り立てられているが、知行高は半減している。幕末期の知行を記した「大小配分石高帳」では物成米六〇〇

石であるので、知行高は長寛以降は変化していない。明治十三年の書き上げでは、次のように記されている。

「千八拾石（朱書）  
六百石

鍋 島 市 佑

先祖納富石見入道道周、胤栄公御代方隆信公御代始迄御家老、二代但馬守信景今山其外拔群之戦功、隆信公御家老物成八千石、三代常海介家輔、直茂公御簪、四代市佑長昭御名字拝領物成千三百拾五石、有馬其外戦功、其後代々着座大組頭等<sup>(6)</sup>

とある。龍造寺隆信の代から存続した家であり、着座で大組頭などを勤めている。藩政初期からみれば元禄末期には、知行高は半減するが、それでも佐賀藩の重臣として重きをなしていた。

鍋島市佑の明治二年の動きを同家の日記から追ってみよう。<sup>(7)</sup>

一月二日には「足輕組代中方御扇子一折差上り事」とあり、市佑が統轄する足輕組より祝いがなされており、このことから軍事体制は旧来の状況が続けられていることが分かる。<sup>(8)</sup> 四日には「今日鍋島左馬助様組其外凡五百人斗り帰陣相成り事」と戊辰戦争で出陣した者のうち五百人ほどが帰領している。<sup>(9)</sup> この出陣における体制も「与」組織であつたことは「鍋島左馬助様組」とあることより窺える。

軍事組織として大組制がまだとられていることは、一月二十一日に「今日大御組頭寄合ニ付、旦那様御事朝五ツ比方被遊御登城」とあり、大組頭の寄合が行われていることにも現われている。幕末期の軍制改革においても、軍備の近代化を行つてはいるが、軍制面では大組体制を抜本的に改めるまでには到っていない。それは「与」足輕制が依然として維持されており、従来の軍事力組織で主要な役割を持った「与」足輕揃いが行われているからである。足輕共組揃い上、テ木ニ鱈一切、れんこん一切、土笠盃のせ差出り上、小組頭御書院ノ南側ニ相並祝居り而、其上旦那様被遊御出座、御口上ニも大殿様御転任御祝ニ付御酒被為頂戴い段御沙汰相成、直ニ御居所ニ被遊御入い

上、足輕共江三べんツ、杓以たし事

とあり、「与」足輕の集りがなされている。二月十日には「今日御組内敵操稽古的式日ニ付、陣屋師として白井次郎兵衛御仲間召連、早朝より罷出、尤組頭始荒々出席有之い事」とある。

藩治職制による藩政改革は、佐賀藩内では容易に進展しなかつた。<sup>(10)</sup>薩長に遅れをとったことから抜本的な改革を主張する動きが強まる中で、藩政府主脳層は明確な方針を持ちえないでいた。軍事組織においても、戊辰戦争の中で旧来の体制が根本的な欠陥を持つているとして、早急な改革を唱えるのには従軍者が多かった。このようなことから、藩主脳は藩主鍋島直大の帰国により事態の打開を策したが、鍋島直大は少将になり、京都に滞っていた。<sup>(11)</sup>

鍋島直大は領政改革のため、京都を発ち下国するが、少将叙任による格別の下国として藩境で迎える体制がとられる。鍋島市佑の動きは、次のようである。

一月六日、少将様御着城被遊い処、御任叙格別之御下国ニ付、諸与目達原松原ニ而被渡御目い付、白井次郎兵衛宿取として御仲間召連、暁八ツ半比右苔野罷越い、尤御幕老切高張御挑灯宿札老枚御目見え場所へ相立い、但札式枚持越い、尤旦那様御宿之儀も縫殿助様御家来坂田惣左衛門宅也、偕又侍も又兵衛宅也<sup>(12)</sup>

とあるように、藩境で出迎える体制をとっている。藩主を中軸とする仕組は基本的には変わっていない。鍋島直大は六日佐嘉城に着城するが、この折も「少将様七ツ半比御着城被遊い付、御祝儀として御登城」<sup>(13)</sup>とあり、帰領祝いのために登城している。

鍋島市佑家は物成知行六百石であるが、その配分地は神埼郡上西郷城原村に八三石余、菅生村に二〇三石余、三根郡坊所郷下津毛村に三三一石余が主なものであった。<sup>(14)</sup>「大石配分石高帳」を村ごとに集計して、知行主と村との関連をみれば、城原村、菅生村、下津毛村いずれも鍋島市佑のみに宛行われていることが判明する。<sup>(15)</sup>それゆえ、これら三村は鍋島市佑の一円知行地である。<sup>(16)</sup>明治二年一月段階でも、この知行地の支配は続けており、藩制初期からの



強固な知行地の支配権は保持していた。<sup>(17)</sup> 一月六日には

百性御振廻ニ付、三ヶ所庄屋・村役・頭百性罷出、例年之通蛤三折・橙柑三折差上い、惣而御料理拝領被仰付相仕廻い而担那樣御帰リ付被渡御目い事

とあり、城原村・菅生村・下津毛村三か村の知行地それぞれから村方三役が年賀に来宅している。また、知行地から夫丸も調達していることは、同じく一月六日に「晩姉川村方御鎧餅突夫丸兩人参りい事」とあるのからも窺える。知行地支配がまだ強固になされており、知行所の産物が献上物としても活用されている。一月九日の日記の中に「少将様江城原柿五十ツ被遊御献上い付、西川十三郎為持、御小性頭迄相頼い、尤御手紙御意左之通」とあり、その手紙には「知行所之柿乍塵株例年之通御内々奉献上度、数五十ツ程為持申い条、御改之上不苦い半も御熨斗ホ迄宜敷御取斗被下度御頼い、以上」<sup>(18)</sup>と小姓頭宛に認めている。

軍事組織として大組頭制がまだとられていることは、一月二十一日に「今日大御組頭寄合ニ付、担那樣御事朝五ツ比方被遊御登城」とあることにも出ている。また、二月四日には「与」足輕揃えが行われている。

知行地の年貢米徴収については「年内下津毛村御上納皆納之人々左之通」<sup>(19)</sup>として十一人の名前が記されており、また、城原村については七人が書き上げられている。これらの人々については「右も前方華境御褒美として鎌耒具、被為拝領い事」<sup>(20)</sup>と褒美に鎌を与えている。年貢上納に関して密接な関連にあり、皆納者に褒美を出すことは、それほど年貢徴収への対応が強いことを示すものであろう。

知行地の存在は、鍋島市佑にとって貴重であった。藩主への贈り物を出す場合、給地内産物が用いられていることは、藩主との結び付きでも知行地が効用を持つことを示すものであろう。年貢徴収においても、年貢率は藩によって定められ、また、給庄屋によって収納されるとしても、知行地より年貢が徴収できることは、家政上でも大きな意義を持っていた。町人からの借銀においても、知行地年貢米が抵当物として供されるなどがあった。

三月二十二日には、知行地より横目が来宅し宿泊していることが「下津毛村・庄屋村横目罷出泊り事」とあり、翌日には「下津毛庄屋村役罷歸り事」と記されている。

このように、明治二年三月段階においても、知行地との関連は密接であり、家屋の修理などにおける夫役の徴用なども限定的になっているが、まだ行われている。知行地困窮時の「お救」も小規模なものは、給人が行う体制にあった。

佐賀藩での藩政改革は難行し、鍋島直正の帰国が要望されるようになり、このため、鍋島直正は、三月に帰国したが、この折の状況については、鍋島市佑家日記には、三月一日に「大殿様御帰城被遊（遊）ニ付、為御祝儀御機嫌伺被遊御登城」と簡略に記されているだけである。しかし、鍋島直正の帰国によって藩政改革は鋭意すめられるが、まだ、直接的には鍋島市佑に影響を与えるまでの動きは、日記には出ていない。

統轄する組が藩内の諸行事の基軸として運用されていることは、次のような事例にも現われている。

松原社祭の警固役に鍋嶋市佑組が命じられたが、それに対して三月五日に組合の主だった者の会合が行われ、六日には「晩日峯社御祭ニ付、警衛方手配として犬塚利右衛門御仲間召連九ツ比罷出夫々手配相整（整）り事」とあり、警固体制を固めている。旧来の軍事組織が基軸になっている。

三月十日には「今日御与内敵操的式日ニ付、早朝より西川十郎御仲間召連罷出」とあるように操練が行われ、また、三月十一日には「今日御組内御寄合ニ付」と組内の会合が行われている。また、藩内の大組頭の寄合が三月二十一日に「今日大組頭御寄合ニ付、朝五ツ時方御登城、御退出四ツ比之事」と行われており、大組頭体制は存続している。しかし、この軍事組織は、戊辰戦争従軍者の帰国で大きな問題になった。<sup>(2)</sup>

戊辰戦争に出陣し帰領した者の所遇が問題になっていたが、それに対して、一定の加増を行うことによって、不満が強まらないような措置がとられている。三月二十八日には次のように記されている。

今般奥羽出勢致され候向、諸切米拾石ツ、御加増被仰付候由、尤右内口而相口(虫食)の者ニ尤式拾石ツ、其内足輕兩人

者之由を侍ニ被召成、式拾五石五斗之御切米口之由ニ御座由、手明鍵ニも式拾石之者侍ニ被召候由也

録高構成では二五石である足輕を二五石切米取りの侍に、手明鍵でも二五石の面々を侍にしている。

戊辰戦争出軍者に対する対応が出ていることは、出軍者への措置が欠かせないことを示すものであり、藩内において出軍者の不満が介在していたことを窺わせる。従来の戦役においては、恩賞が前提とされていたが、戊辰戦争では、幕府方の領域は天皇の直轄領とされ配分の対象にならなかった。それだけに、戊辰戦争出軍者への恩賞は藩内部での矛盾を深める要因となった。そのため、出軍者には一様に切米一〇石加増の措置をとっている。また、一部の者には侍に取り立てている。

「日記」には出軍者の動向は余り書かれていないので、詳細は「日記」からは窺えないが、三月下旬での措置は藩政改革の推進上では、最早や従軍者への対応が放置できない事態にあったとも考えられる。藩治規約の制定で軍事体制の整備を進めることが出されるが、この政策推進でも、今度の措置は必要とされたとみれる。

鍋島市佑は、明治二年一月から三月三十日まで、「日記」による限り、旧来の大組頭としての職責で行動しており、知行地との関係も余り変化していない。軍制も「与」体制であり、戊辰戦争によって、それが急速に改められたようでもない。この点からすると、明治二年三月までは、鍋島市佑には時代の大きな動きはまだ直接的には及んでいない。ところが、明治二年三月三十日は「御用之儀由条、明朔日五ツ時御城出仕可有之事」と藩政府よりの呼び出がなされた。四月一日の「日記」には、次のように記されている。

今日御組儀御用旁御登城被遊由、御用次第今般大隊長被為蒙御達、五日之内御出勢被遊由、御内達被為蒙蒙  
い事

大隊長として出軍することが命じられている。同日の日記には



此節大隊長ニ而副大隊長石井平九郎殿・原田暢之助殿外ニ役人色々有之由、都合兵隊四百人斗り由ニ御座いとあり、四〇〇人の兵隊を率いて出軍することになったことが窺える。また、同日の記事には

御変革ニ而廉々御達有之、達帳ニ成ル

とあり、藩政改革に関したことがこのような表現で書かれている。藩治規約が制定され、新しい体制が施行されるようになったが、この動きは、「日記」にも現われている。藩政改革の影響が日記にも直接的に反映するようになっている。これは四月に入れば一層顕著に現われてきている。

明治二年四月三日の日記には、藩治規約に集約された藩政改革について

一、今般御変革ニ付而各方始版籍被差上り末、御組内之儀も小与迄差上相成り方ニ而御相談寄合有之差上相成り、尤諸与も同様今日申談有之

一、右ニ付、御親類様方ハ諸公子之例ニ被召成、御家臣之儀御直人ニ被召成り、御三家様方も諸公子ニ被召成、御家臣も右同断之事

とある。版籍奉還のことが記されている。版籍の返上を行い「与」まで差上げたとある。有力な軍勢力を支えていた「与」体制が廃止される状況になっている。地方知行地と「与」の廃止による藩政府への権限集中はきわめて大きな変革であるが、実際に知行地を持ち大組頭でもあった鍋島市佑にとっては打撃は大きかったとみれるが、家政日記にはこの点は明確に出ていない。しかし、一番大隊長の任命に伴う措置で直接的に及んできている。それは従来存立の基盤であった「与」の差上によって現われている。

藩治規約の制定による機構改革で鍋島市佑は軍事局の大隊長に任命されている。軍事局の構成は

知事

兼勲池田 文八郎

大弁事

福島 礼助

大隊長 福島市佑

船将 眞木 安左衛門

副大隊長 平井 平九郎

原田 暢之助

兼勤田村乾太左衛門

兼勤副 島 謙<sup>(24)</sup>

となっており、鍋島市佑は大隊長に就任している。藩治規約下での藩政府機構の中で軍事局の主人メンバーに位置するようになっていく。大隊長就任の背景は明らかでないが、大組頭を勤めていたことなどが影響していたと思われる。この大隊長ということから、東京の出軍になったとみなされる。それは副大隊長の石井平九郎と原田暢之助も出軍組に入っていることから窺える。

四月一日に一番大隊長に任命されてからの変化としては軍事局への出勤がある。四月四日には「今日軍事局御出仕、九ツ過比御下り之事」、五日も「今日軍事局御出仕、御下り九ツ半比之事」、六日も「今日軍事局御出仕、御下懸須古屋敷御出、御帰リ七ツ比」とあり、ほぼ毎日軍事局へ出勤するようになっていく。軍事局への出仕は東京への出軍日である四月二十一日まで続いている。藩政の軍事局での中心メンバーとしての動きがみられ、鍋島市佑の役割が高まっている。

東京への出軍が命ぜられた鍋島市佑は出軍体制と整えているが、四月五日には

此節一番隊副大隊長石井平九郎殿・原田暢之助殿外ニ伝令五人御招ニ付八ツ比右人数御出、七ツ半比引取相成

とあり、出軍準備に着手している。これは従来統轄していた「与」を差上げた上でなされたものであることは、四

月八日の日記に

去ル三月左之通ニ御組着到御役目帳副被指出事

と記し、続けて鍋嶋市佑名による差上文を書き写している。それには

私儀今般一番大隊長被仰付ニ付、是迄被仰付置ハ組之儀差上申ハ、此段御達ハ、以上

巳四月

(鍋嶋市佑)  
御名御印

岩村 右近殿

中野 数馬殿

池田 文八郎殿

深江助右衛門殿

張 亥一殿

前山 精一郎殿

とある。文面では一番大隊長を命ぜられたので「与」を差上げたところがあるが、これは藩治規約に伴う措置であることは、四月三日の日記から裏付けられる。また藩政府に提出したものであることは、岩村右近ほか五名がいずれも藩政府最高役職者であることから窺われる。

「与」の差上げは鍋嶋市佑にとっては、一番大隊長の任命ということもあって、極度の不安を伴ったものでなかったとみれるが、それでも、変化が直接的に及んできている。藩治規約に集約された藩政改革は鍋嶋市佑にも大きな影響を与えるようになっていく。一番大隊長への任命ということは、藩内では軍事部門では中心的な役割を帯びようになったことを意味する。それは藩治規約による藩政府機構の中での軍事局の構成に現われていた。鍋嶋市佑は、藩治規約による軍事機構の変化の中で、最も直接的な影響を受ける立場になった。軍事局の大隊長職を勤め、東京

の出軍を命じられ、大組頭として存立基盤であった「与」の差上げといった事態はまさしく劇的な変化であった。三月末日までの状況とは決定的に異なった事態に面するようになっていた。戊辰戦争後の諸変化の渦中に取り込まれた事態になり、急速な対応を迫られる境遇となっている。

ところで、鍋島市佑への東京出軍は、東京遷都に伴う状況が背景にあったとみれる。「肥前藩日誌」の中に「御達ノ写」として「其方一大隊東京繰出シ候様ノ事<sup>(26)</sup>」とある。これによって東京警固役として鍋島市佑に出軍が命じられたことが窺える。これは東京での状況に対応するため、東京遷都に伴う警固体制強化の動きに備えたものとみることができる。四月二十二日には「京都ヨリ急使到着、朝廷ヨリ相渡サレ候御書付写」とあるものに

鍋島少将

其藩兵隊東商皇居御守衛被仰付候間、早々同所へ差出スヘキ旨御沙汰候コト

但シ兵隊ハ一大隊差出スヘキコト

四月

行政官<sup>(27)</sup>

とあり、皇居守衛のために一大隊の出軍が維新政府より命じられている。東京遷都に伴う混乱に対応するため、維新政府は従来の関東周辺小藩による警備から雄藩にも依存する状況になったとみれる。それが佐賀藩兵の急なる出兵命令となって現われたのであろう。佐賀藩は、この命令に対しては、上京させた鍋島市佑隊で警固に充ることにした。四月十四日には、

今度一大隊被相任御出勢被遊<sup>(28)</sup>ニ付而も役々江御談被為在由ニ而被成衛招<sup>(29)</sup>趣伝令役御沙汰被遊<sup>(30)</sup>ニ付、右伝令役より手紙被差廻<sup>(31)</sup>ニ付、副大隊長石井平九郎殿・原田暢之助殿始凡三拾八人何連も八ツ比方段々揃<sup>(32)</sup>ニ相成<sup>(33)</sup>い、夜四ツ比引取相成、但席順并ニ出物左之通<sup>(34)</sup>

とあり、出軍のための相談が行われている。この折のメンバーは、大隊長、副大隊長、司令、器械幹事、輜重幹事、



三等医、伝令、二等司令、副司令、砲隊副司令、二等斥候、輜重副幹事、二等副司令、小司令、各砲司令、器械録事、輜重録事、二等小司令、嚮導の役職にある者で、その総数は三八人であつた。<sup>(29)</sup> 話合の内容は不明であるが、出軍準備についてとみなされる。四月十五日には

御出勢被遊筈ニ付袖印大隊長旗巻本、胴乱巻ツ尤袖印之儀も御主従五人前相渡候、尤器械方へ為請取犬塚利右衛門仲間召連罷出候事

とあり、大隊長に袖印・大隊長旗・胴乱が渡されている。出軍の体制が進展しているのが窺える。

東京への出兵は四月二十一日と決まり、その準備が一段と進められている。四月十七日には

御出勢之儀東京迄廿一日迄御立ニ相決付、咄分中御馬廻中へしらせ之手紙差出、尤伊万里迄蒸気船へ御乗込相成筈ニ付、且又一番大隊之内一小隊も原田暢之助殿頭取ニ而十九日出立相成、御屋敷ニ而勢揃有之付而御酒被

差出付筈ニ付、御給仕方納富次三郎・池田清太夫へ明日罷出付様手紙差出付事

とあり、四月二十一日出立の決定と、一小隊が十九日に先発する旨を記している。ところで、出勢軍の構成であるが、鍋島市佑の与私という旧来の体制とは大きく異なっている。「弘化二己年総着到」より旧来の「市佑組私着到」についてみれば、表1のようである。

弘化二年では二五人組を中心とした鉄砲足軽、大筒足軽、弓足軽の「与」組織より成り立っている。この限りでは旧来の軍事組織の域を出ていない。これが先述のように、小隊編成を基軸にしたものとなり、小隊長、司令、伍長という編成がとられるようになっていく。大隊長である鍋島市佑の従者についても四月十七日に「最前も御主従六人之御定ニ付」と六人と定められ限定されたことを記しており、従者は「御出勢御供左之通尤軍事局へ名書差出付」として四人の名前が記されている。出軍者に対しては陣服料一人充て三両が出されていることから新陣服が整えられたとみれる。それについては



御出勢御供四人へ輜重方と陣服料として、𦵏人前ニ金三兩ツ、相渡り処、陣服拵入具四兩余ツ、相懸り居り付、𦵏兩ツ、御手許方増金被差出し、且又月給として月々貳兩ツ、相渡り由ニ而半ヶ月分𦵏人前ツ、相渡り事<sup>(30)</sup>とあり、三兩では調達できないので、従者に一兩づつ与えていることを記している。

出軍について、鍋島市佑に対しては

今度出陣申付候条、隊中ノ号令進退ハ勿論輕重トナク悉ク委任候事<sup>(31)</sup>

と隊統轄權が委任され、副大隊長の石井平九郎と原田暢之助に対しては

表 1 鍋島市佑組織構成（知行単位：石）

	知行（物成）高	人数
大組頭	600	1人
手明鑓頭	78	1
手明鑓40人并御大筒	) 60（切米）	1
足輕25人与頭		
手明鑓頭次席		
御小道具之者25人与頭	120	1
御鉄砲足輕25人与頭	50（切米）	1
御足輕25人与頭	35（切米）	1
御鉄砲足輕25人与頭	35（切米）	1
御小道具之者25人与頭	30（切米）	1
御馬印奉行	200	1
	140（切米）	1
	130	1
	110（切米）	1
	105（切米）	1
	90	2
	80	2
	50（切米）	1
	45（切米）	1
	45（切米）	1
	40（切米）	3
	36(米) (20人扶持)	1
	35（切米）	1
	30（切米）	4
	25（切米）	6
	20（切米）	4
	18(米) (10人扶持)	2
	14.4(米) (6人扶持)	1
	9(米) (5人扶持)	4

注 「弘化二巳年総着到」より作成

(1) 忒は加えていない。

今度出陣申付候条、大隊長ヲ輔ケ戦策ハ勿論隊中ノ号令進退誤ラサル様尽力可致候コト<sup>(32)</sup>と伝達している。

大隊長、副大隊長の任命と権限伝達が行われているが、出軍隊への「定」も制定されている。それをみると次のようである。

今度出兵ニ付被相定候廉々左之通

一護旗卒並ニ旗手兵卒ヨリ回番相勤ムヘキコト

一巡邏番兵並ニ武器輜重ノ護兵銃隊ヨリ回番相勤ムヘキコト

一行軍ノ節、脇道ヲ取又ハ跡ニ後レ候儀停止タルヘキコト

一戦地ニ於テ小隊中死傷並ニ玉薬兵糧其場心遣ヒ之儀ハ其伍長ヨリ致スヘキコト

但大体総心遣ヒハ器械方輜重方ヨリ致シ候儀勿論タルヘキコト

一営中異変有之節ハ各其長ノ営ニ纏ヒ本陣ノ令ヲ待ヘシ、他出ハ堅ク停止タルヘキコト

一戦地ハ勿論不快ニテ行軍相断候向ハ、時々医師手形ヲ以テ其長ヘ達出、其長本陣ヘ申届クヘシ、差懸リ候節ハ名書ヲ以テ達出後以テ医師ノ手形差出スヘシ、自然作病ホコレアルニ於テハ、手形差出シ候医師其罪本人ヨリ重カルヘキコト<sup>(33)</sup>

とあるが、出軍において細い定めになっている。これらの中で、小隊、伍長、兵卒という語があることから、これらは従来の番方体制に基づく軍勢ではないことが窺えるが、大隊―小隊という洋式軍制がとられていることは、同時に示された「大隊職制」に出ている。それは次のようになっている。

大隊長 大隊ノ長トナリ、軍律ヲトリ、号令ヲ発スルヲ掌ル、凡隊中ノ事総サルナシ

副大隊長 掌ル大隊長ニ同シ、但左右半大隊ヲ主掌ス

伝令 隊中ノ号令ヲ受付シ且日誌ヲ作ルヲ掌ル

吏生 掌ル文官ニ同シ

使卒

司令 一小隊ヲ指揮スルヲ掌ル

副司令 半小隊ヲ指揮スルヲ掌ル

小司令 左右一分隊ヲ指揮スルヲ掌ル

嚮導 左右半小隊ヲ嚮導スルヲ掌ル

斥候 地形ヲ察シ敵情ヲ探リ凡諸ノ使命ヲ達スル

哨卒 斥候ノ附属トナリ凡諸ノ探索ヲナスヲ掌ル

器械幹事 大小銃及彈藥凡諸ノ武器ヲ調現配付スル

輜重幹事 軍資ヲ出納シ糧食ヲ運送シ死傷ヲ知り陣營ヲ定メ凡諸ノ建築ヲ掌ル

録事 掌ル文官ニ同シ

史生

器械師 諸ノ武器ヲ製造修理スルヲ掌ル

樂卒 鼓笛喇叭凡諸ノ聲号ヲ掌ル

護旗卒 本陣ノ大旗ヲ護スルヲ掌ル

砲隊長 合砲隊ヲ指揮スルヲ掌ル

司令 砲隊ヲ指揮スルヲ掌ル

副司令 半砲隊ヲ指揮スルヲ掌ル<sup>(34)</sup>

ここに示されている大隊長、副大隊長、司令、幹事の職責は小隊制が設けられた場合にみられるもので、特に新しいものでないが、従来の番方制からすると著しく異なっている。西洋式軍制がとられているが、小隊の存在は司令の職責から窺えるが中隊組織はとられていないようである。新しい軍制で出軍体制が整えられている。

四月十九日には先発隊の出立が行われている。

一番大隊之内、軽卒一小隊役懸り入テ七拾人余出勢、副大隊長原田暢之助殿頭取ニ而朝五ツ時比御方揃切ニ付、御書院方御広間迄壺枚替シ疊剝置、軽卒迄屯相揃ひ上御酒被差出、鰯三ツ切ニ配ひ而盃をも引廻冷酒ニ而被差出ひ、尤謡三番有之、惣而御門前ニ而兵隊与立相成、行軍ニ而日峯社参詣有之、帰りも行軍ニ而御門前通行相成ひ而御城上り有之<sup>(35)</sup>事

出軍として一小隊の先発について伝えている。出軍の体制が整えられている。

本隊の出軍については、四月二十一日の日記に

今日朝五ツ時揃切ニ付、担那樣御事被遊出勢咎ニ付、五ツ前辺方御書院御広間御式台迄壺枚替シ疊剝重屯相成、凡百人斗り相揃ひ上、御酒被差出鰯三ツ切ニ配りひ而、盃をもをりへ盃茶碗ホ広盆ニのせ銘々行廻冷酒ニ而被差出ひ、惣而御門前ニ而御馬上方兵隊被遊組立、行軍ニ而御登城、其方御門前御通行ニ而日峯社御参詣、其末東西二手ニ相成、西ハ大隊長担那樣行軍ニ而小田御昼食ニ而武雄御止宿也、尤伊万里方蒸氣船御乗込之事、東ハ副大隊長石井平九郎殿頭取ニ而神崎昼喰ニ而轟木止宿也、尤黒崎方渡海船方乗込之事

先発隊の出軍の折と余り変わらない、本隊は伊万里から蒸氣船で他一隊は黒崎より船で行くことになっている。

四月二十一日の出軍については、「肥前藩日誌」には、次のようにある。

四月二十一日一番大隊東京進発ニ付、御式台前ニ於テ総兵へ軍陣掟左ノ通り相達セラル

とあり、軍陣掟が達せられているが、軍陣掟は、次のような内容である。

一 今度陣中ニ於テ其長ノ下知相背ク可ラス、縦令存寄コレ有ト雖モ等ヲ越ヘ申出候儀堅ク禁止セシメ候コト  
一 戦地ニ於テ手柄粉骨ノ輩ヘ其長見究メ、其日大隊長ヘ申届クヘキコト

一 狼籍乱妨堅ク禁止セシメ候コト

右ノ条々此旨ヲ守ルヘシ、若違背ノ輩之レ有ニ於テハ嚴科ニ処スヘキ者ナリ<sup>(36)</sup>

とある。この軍事掟の伝達には「右執政、参政、軍事務局知事、同大弁務列席、執政申達ノ上、大弁務ヨリ読上ケ写ヲ大隊長ヘ相渡シ、畢テ樂器御免ニテ出城相成候コト」とある。<sup>(37)</sup> 軍事掟は特に新しい項目はないが、藩治規約が制定され、新しい体制が施かれた上での最初の出陣であつたことに特徴がある。

鍋島市佑隊は四月二十一日に出発したが、これは東京皇居守備の軍勢となつた。先述のように、四月二十二日には、京都よりの至急便として東京皇居守衛が維新政府によつて、佐賀藩に指令されていたので、その措置として鍋島市佑隊は運用された。

鍋島市佑の率いる一大隊の上京後の動向については「日記」に書かれていないので、別の史料から、それについて窺ふことにしよう。

鍋島直大の明治二年の上京中の動向を記した東行方の「日記」があるが、その五月三日に

一 御国許より繰出之一大隊之内百八十四人昨夜品川着岸之末、今日桜田御屋敷着相成候事

一大隊長鍋島市佑其外為伺御機嫌御屋敷被罷出候事<sup>(38)</sup>

とある。これよりして、四月二十一日に佐賀を發つた鍋島市佑隊は五月三日に着京していることが知れる。

五月四日には

御国許より繰出相成ひ一大隊之内、左之通昨二日夜品海着船、今日三日桜田御屋敷到着仕ひ、此段達上聞ひ

大隊長鍋島市佑



小隊司令久富梅之允

士分二番隊

右同生野小十郎

輕卒五番隊

其外役、夫卒等

入而都合百八

十七人

とある。五月三日に着京した旨が五月四日の日記に書かれている。本隊と別に出発した石井平九郎の二小隊も五月十三日に品川に着船して在いる。<sup>(39)</sup>

左京中の鍋島市佑隊の動向については、六月十三日の動きとして

桜田御屋敷罷在の一番大隊之内、今日大砲天覧有之<sup>(40)</sup>事

とある。政府軍の兵力として出軍した鍋嶋市佑隊は、天覧ということで政府軍の軍事力を誇示する一翼を担ったが、大砲の天覧ということになっている。

鍋島市佑隊も六月十四日に出京になった。「来ル十四日より御国元引払被仰付<sup>(41)</sup>而も同日明六時於御馬場被渡御目方<sup>(42)</sup>も有之間敷哉吟味之事」

という伺いに対しては「此通」とある。この上で一番大隊より、次の上申がなされている。

来ル十四日方一番大隊引払被仰付<sup>(43)</sup>付、同日於溜池御屋敷被渡御目<sup>(44)</sup>付而ハ、卒御披露之儀、昨年凱陣之節各名御披露被仰付<sup>(45)</sup>見合も有之、殊ニ軍ニ而も平士同様之勤向ニ付而も例格ニ不拘此節も同様名御披露被仰付度、於然も兵制御改革之折柄尚又奮勵之場ニも可相到ニ付、難閣奉願儀<sup>(46)</sup>ハ条尚被遂御吟味度、此段致御達<sup>(47)</sup>、以上

巳六月

一番大隊<sup>(42)</sup>

東京出兵に際して士分と同じように卒についても名前を披露をするよう要望したものであった。伺いに対する結果については記されていないが、聞き届けられたものと思われる。

鍋島市佑隊の出京の背景には対馬の動きがあった。五月二十六日に佐賀藩に対して維新政府より、次の指令があった。

本月六日対馬浅海浦江賊徒六百人程渡着之趣相聞<sup>(43)</sup>ハ、箱館屯在之賊ニも有之哉之風聞ニ付、其藩より至急逐探索、自然右様之儀ニハ、機を不失速ニ追討可致旨御沙汰<sup>(43)</sup>ハ事

と対馬に賊徒六〇〇人程が渡着し、それが函館屯在の賊徒かもしれないとして、佐賀藩に探索を命じている。更に五月二十九日には、維新政府の軍務官名で

其藩兵隊兼而東京御守衛申付置<sup>(44)</sup>ハ、対州動乱之聞有之ハ付、当地御守衛被免<sup>(44)</sup>ハ、帰国可致<sup>(44)</sup>ハ事

と東京警固隊の帰藩が対馬との関連で命じられている。対馬に函館屯在の反政府軍が着島したという情報は、維新政府にとって対馬への対応を要することになり、それが鍋島市佑隊の帰藩ということになっている。

維新政府が対馬に関する情報を重視していたことは、五月二十九日で佐賀藩に対して、次のような指令を出していることにも現われている。

先般蝦夷地江脱走モルラン江碇泊之賊艦本月六日対州江回着、彼地動乱之聞有之ハ、其藩兵隊五百人彼地江出張申付<sup>(45)</sup>ハ事

と、佐賀藩兵五百人の対馬への出兵を命じている。

対馬情報は対馬藩よりの報知によってロシヤ艦の入港である旨が判明したことを六月十一日付を以って、維新政府軍務官に報告している。<sup>(46)</sup>

以上のような状況において帰藩した鍋島市佑隊は六月二十三日に佐賀城に着いている。この状況を次のように記している。

今朝五ツ時、旦那様御始御帰陣相成、直様御城御上り、其末松原御通行ニ而日峯社御参詣ニ而御屋敷御突相成<sup>つて</sup>付、御出立懸畢意ニ而一統へ御酒被差出<sup>い</sup>とある。

鍋島市佑隊の出京は短期間であつたが、佐賀藩軍制では大きな意味をもっていた。その一つは軍制が明確に大隊編成をとつたことである。大隊—小隊という軍事組織の編成であつた。それは「大隊職制」に明確に出ていた。そのことは、この大隊編成が佐賀藩の軍制改革との関連で行われたことを反映している。

注(1) 「納富家系図」(「諸家系図」所収)。

(2) 藤野保編『佐賀藩の統合研究』(吉川弘文館、一五八一年)第二八表参照。

(3) 『五カ国配分帳并惣方帳』に所収。

(4) 前掲系図。牢人になつた経緯について「着座并家々之一通」には、次のように記されている。

水町乃庵日記ニ左之通、文化九年見当<sup>い</sup>ニ付書載之

元禄十三年十二月廿三日、鍋島九左衛門病氣罷在、御奉公相勤申躰無御座<sup>い</sup>、悻儀幼少御座<sup>い</sup>、依之九左衛門知行居屋敷被召上、悻忠五郎江も忒百人扶持被下、居屋敷之儀も鍋島正衆徴ニ被下<sup>い</sup>由、鍋嶋弥平左衛門、鍋島喜左衛門、生野市佑、執行与然右衛門、高木勘右衛門被召出被仰渡

但宗茂公御仕立之御系図、九左衛門と有之<sup>い</sup>、此九左衛門、正章ニ相当<sup>い</sup>

(5) 同右。

(6) 「家筋調ニ付留書」。

(7) 「城原鍋島家日記」明治二年。

(8) 佐賀藩の軍事機構については、初期は、藤野保編「前掲書」第二章第二節、高野信治「佐賀藩における家臣団の編成と構成—『与着到』の分析を中心として—」(藤野保編『九州近世史研究叢書』第二巻所収、図書刊行会、一九八四年)、同「成

立期佐賀藩における家臣団編成の原理と構造」『九州史学』八二号、一九八五年）参照。

(9) 佐賀藩の戊辰戦争参加の状況については宮田幸太郎『佐賀戊辰戦争史』（佐賀戊辰戦争刊行会、一九八一年）参照。

(10) この間の情勢については、『鍋島直正公伝』第六編（大正九年）三二八—三四一頁。

(11) 『鍋島直大公実記』。

(12) 『城原鍋島家日記』明治二年一月五日。

(13) 同右、明治二年一月六日。

(14) 『大小配分石高帳』。

(15) 拙稿「佐賀藩村落構造に関する一考察―村と知行地―」（『西南地域史研究』五輯、文献出版、一九八三年）

(16) 天明七年（一七八七）の「肥前国佐賀領村々目録」と天保五年（一八三四）の「天保郷帳」には菅生村は記載されていないが、地理的には城原に隣接した所に菅生がある。

(17) 佐賀藩の幕末期における給人と知行村との関係については、拙稿「佐賀藩の幕末期における地方知行村に関する若干の考察」（『佐賀大学経済論集』一四巻三号、一九八二年）、同「佐賀藩地方知行関係文書―知行村に関する史料（仮題）―」（『佐賀大学経済論集』一四巻一号、一九八一年）。

(18) 『城原鍋島家日記』明治二年一月九日。

(19) 同右。

(20) 同右。

(21) 『鍋島直正公伝』第六篇三六九—三七七頁。

(22) 同右、三二八—三三三頁。

(23) 『城原鍋島家日記』明治二年三月三十日。

(24) 『肥前藩日誌』二号。

(25) 戊辰戦争従軍者の中で功績のあった前山精一郎が、藩政改革において軍事部門を統轄して改革を進めているので、この間、何らかの関連があったとみれる。

(26) 『肥前藩日誌』二号。

(27) 同右。

(28) 『城原鍋島家日記』明治二年四月十一日。

- (29) 同右。
- (30) 同右、明治二年四月十七日。
- (31) 「肥前藩日誌」二号。
- (32) 同右。
- (33) 同右。
- (34) 同右。
- (35) 「城原鍋島家日記」明治二年四月十九日。
- (36) 「肥前藩日誌」二号。
- (37) 同右。
- (38) 「日記、明治二年巳三月と七月迄、東行方」五月三日。
- (39) 同右、五月十三日。
- (40) 同右、六月十三日。
- (41) 同右。
- (42) 同右。
- (43) 「仮日記、明治二年巳六月、司礼所」六月五日。
- (44) 同右、六月八日。
- (45) 同右、六月七日。
- (46) 同右、六月十日。
- (47) 「城原鍋島家日記」明治二年六月十三日。

### 三 藩知事制下の状況

明治二年六月七日に「今日依召御参朝被遊い処、左之通御書付御以戴被遊い事<sup>(1)</sup>」として次の書付を佐賀藩主鍋島



直大はもらっている。

鍋島直太  
鍋島少将

今般版籍奉還之儀ニ付深ク時勢ヲ被為察広ク公議ヲ被為採政令帰一之思召ヲ以テ言上之通被聞食候事

六月

行政官

と願ひ出ていた版籍奉還を聞き届けることの書付と

鍋島少将

佐賀藩知事被仰村候事

明治二年己巳六月

と鍋嶋直大を佐賀藩知事に任命した書付である。版籍奉還によつて、藩知事制が施行されるようになった。

藩知事制によつて藩体制は大きく転換した。藩主の領内統治権は弱まり、藩主は藩知事という維新政府の行政機構の一端を担う立場に過ぎなくなつたが、これはまた領内でも大きな変化をなすものであつた。

版籍奉還による藩知事制の施行であつたが、版籍奉還の動きは、佐賀藩では集権化を促進した。一月二十日に薩摩、長州、土佐、佐賀四藩主の版籍奉還願いの提出以後、佐賀藩内では支藩や上級家臣の版籍奉還願いが強まつた。三月には小城、蓮池、鹿島三支藩主から、また、広域の知行地を持つ親類同格級の上級家臣が版籍奉還を願ひ出た。<sup>(2)</sup>維新政府のこの問題に対する方針が明確でないこともあつて、この時期には特別な措置はとられていない。しかし、四月になると、上級家臣の版籍奉還願いを承認する。<sup>(3)</sup>これは本藩の版籍奉還が維新政府によつて認可されていない段階では、地方知行制の廃止と知行地の本藩への集中化ということを意味する。藩制初期から存続してきた地方知行制はここに解体することになった。藩主と同じように、上級家臣も領知権の放棄を覚悟してのことよりむしろ新しく領知権を新政府によつて認められることを志向しての版籍返上であつたともみれるが、事態はその思惑を越え

て進展する。

鍋島市佑の家政日記から、この間の動向を検討してみよう。鍋島市佑の出京中であるが、五月十七日の日記には先般版籍返上御建白之通土地人民共不被遊私有思召ニ付、御家中も勿論諸家来共都而政府へ御附屬被遊、則今已往も御家中諸家来之名目被相止更ニ藩中と相唱ひ様被仰出い事

と記されており、版籍奉還のことにおいて、土地人民を私有しないということから、藩士や陪臣いずれも藩政府に附屬させ、名称も藩中と唱えるようにしている。上級藩士が抱える家来は、佐賀の重要な軍事力構成をなしていたが、これらいずれもが藩政府の統轄することになった。これは必然的に従来の軍事力編成を変化させるものとなった。

版籍奉還に伴い陪臣も藩士も一括して藩中と唱えるようになったが、これは地方知行制の廃止に伴う問題とも関連することであつた。五月二十九日には

千石以下之知行都而切米ニ被召成<sup>(4)</sup>

と千石以下の知行はすべて切米取となった。地方知行制の廃止に関連した動きであつた。これらの上になつて、六月十二日の日記には次のような改革がなされていることを記している。

諸家返上之土地人民政府ニ引請、諸事公儀を尽可取計旨最前被仰出い付而も、大小之仕組可被相立い得共、差向ハ廉々先以左之通被相定方ニ而可有御座と吟味仕い、此段奉伺候

一土地人民一切掛り郡令所江被相寄い様

但租税収納等之儀も追而被相定い事

一士并卒之居住も打追之所ニおゐて団結被相建い様

一兵隊も軍事局と総括致心遣い様

一文武之課も小学校陸軍所被相建稽古致<sup>(5)</sup>様

土地人民はすべて掛り郡令所に統轄するとしている。土地人民が版籍奉還の結果、藩政府の統轄するところとなつたが、その具体的運営として、郡令所で管轄することになっている。軍事力編成において、大配分級の抱える兵力は重要な役割を持っていたが、これは団結という名称の下に存続することになっている。また、これら団結の軍事力と別に鍋嶋市佑隊のように新たに編成された兵力は藩政府の軍事局が総括する体制をとっている。これらは「此通<sup>(6)</sup>」とあるので、藩主鍋島直大の承諾をえている。それゆえ、藩の決定となった。

このような動きがあつた上で、先述のように佐賀藩主鍋島直大に対して版籍奉還の認可と藩知事への任命が六月十七日に行われた。領内での集権体制の進行があり、その上で藩知事制という事態になっていることに留意しておくべきであろう。

ところで知行地差上の願いを提出していたが、知行地との関連はまだ続いている。

六月一日には

姉川村庄屋又七<sup>1</sup>方麦粉差上<sup>1</sup>付、千平<sup>1</sup>壹袋被下<sup>1</sup>事<sup>(7)</sup>

と知行地から麦粉が献上されており、また、六月四日には、

下津毛村・城原村庄屋村役願書持参いたし罷出<sup>1</sup>、右も去秋作損毛、当夏麦作をも損毛、近年打続凶作而已ニ而、当夏御蔵究潰し<sup>1</sup>者勝ニ有之、至極難渋差迫り<sup>1</sup>付、御米拝借奉願<sup>1</sup>処、格別之訳を以下津毛村へ米廿石、城原村へ拾石当秋<sup>1</sup>五ヶ年返上ニ<sup>1</sup>、拝借被仰付<sup>1</sup>、尤右ニ付而ハ両所共御再興村同様相心得、仕与相立追而書付差出シ可<sup>1</sup>申答也<sup>(8)</sup>

とあり、下津毛村と城原村の者が凶作続きで難渋しているとして拝借米を願い出たものであるが、これに対しては、下津毛村に二十石、城原村に十五石を与えている。旧来の知行地支配が実質的には存続している。

知行地との関係は、版籍奉還との関連で知行地が廃止され、藩政府に統轄されるようになったが、実質的にはまだ存在している。

六月二十日は同月十九日の洪水で城原村の土居が崩れたとして届け出ているが、その間の動きは次のようになる。<sup>(9)</sup>  
 一昨夜之大洪水ニ而御知行城原村水詰土居拾七間余及切度ハニ付、夫丸兩人ニ而御注進申上ハ、尤口達書致持参  
 ハ、諸又大川土居之儀既ニ及切度ハ筈之処、小淵村分百間余及切度ハ付、此節も先以仕合之儀ニハ事  
 と城原村から土居が十五間余り切壊した旨の届けが村からなされている。

口 達

但大川土居  
 一引落所 凡八拾間

但水諸土居

一切度 凡九間

但同所

一 同 五間

但右同所

一 同 式間

但右同所

一 同 壱間

ノ

右も御知行所城原村昨十九日夜大洪水ニ而及切度ハ、此段御注進申上義ニ御座ハ、以上

巳六月廿日

福田又左衛門殿

庄屋勘助

右之通御注進申上ハ付、寅年畢竟左之通相認、当名なしニハ政府へ被差出ハ、尤御知行所之御注進書をも一同  
 ニ被差出ハ

城原村庄屋勘助が村内洪水のために土居切壊の規模を報告している。この報告を受けて、知行地は藩政府に届け

出ているが、その届けは次のようである。

口 達

私知行所神埼郡城原村之儀、昨十九日夜之洪水ニ而水詰土居其外既ニ及拾七間余ハ切度致出来、偕又大川土居之儀も凡八拾間余程引落所致出来ハ段申越ハ、依之此段御達仕ハ、以上

巳六月廿日

出張中二付  
御名  
代判  
納富右膳

藩政府に届け出ているが、知行地の災害を届け出る形式は従来の様式通りであり、知行地としての運営がまだ続いている。

七月一日の日記には

姉川村庄屋又七罷出ハ、但御藏究御封印として也

とあり、知行地庄屋が藏究封印のために来宅している。二日には「城原村庄屋勘助罷出ハ、但御藏究御封印として也」とあり、城原村についても同じ動きがみられる。

七月二日には

一姉川村庄屋又七一先罷帰リハ、右も昨日ハ御藏究御封印として可罷出居ハ処、下津毛・城原両所共、役々出浮不申ニ付、余リ待長ク有之ハ付而也

一城原村庄屋勘助罷出ハ、但御藏究御封印として也

とあるように、知行地藏究として知行地の庄屋が対応している。

七月十一日には

城原村ハ当盆当リ物持夫丸耆人参リハ事



と盆行事のために知行地から夫役の者が出向いている。十二日も城原村、十三日は下津毛村、姉川両村から盆当り物持夫丸が来ている。

七月十五日にはお救米を出している。

一下津毛村文七儀極難者之儀被聞召、米三斗御救被仰付事

と下津毛村の極難者に米三斗の救助米を支給したことを記しており、知行地へのお救いを行っている。

七月二十一日には

下津毛村村役利平罷出、但當夏永雨故欵田方一般ニ過分之虫入致シ趣ニ付而、右御注進之為也、但口達書左之通相認持参いたし事

口達

御知行所下津毛村當夏田方毛上之儀永雨故欵生立惡敷有之上、田方一般ニ虫入到、當時只様存外之太虫ニ相成如何可相成哉、此段難閣御達申上儀ニ御座、以上

巳七月

村役利平

庄屋源左衛門

福田又左郎殿

とあり、知行所の損耗について村役と庄屋が報告している。この進達の様式は以前と異なっていない。知行所という名称はまだ用いられており、損耗、お救い、夫丸など従来の知行地との関連が続いていることが窺え、知行地は存続している。

版籍奉還によつて土地人民は天皇に帰属するという体制がとられたが、藩知事体制下においても郡令所で統轄するという状況は続いている。地方知行地は廃止になったが、現実に知行地との関連が保たれていることは、先述の

ことにも現われていた。しかし、維新政府は六月末には藩制について集議院に諮問したが、この諮問の内容が佐賀藩にも届き、それをめぐって藩上層部で討議が重ねられ、具体的施策について七月中旬に旧藩主鍋島直大の指示を迎ぐという事態が進展していた。<sup>(10)</sup> この藩制改革を指示した「藩制」の布告は十月四日に行われたが、佐賀藩内では、すでに諮問された内容に沿った動きがみられた。禄制改革も六月二十七日に藩知事に命じており、改革の動きは速かったが、鍋島市佑においては、家政日記に、それが記されるようになるのは八月に入ってからである。旧知行地の収納高調査に関するものである。これについて、旧知行地の庄屋が相談のため来宅している。

八月六日に知行地三村の庄屋が参上して郡令所の指示への対応について相談した。

三ヶ所庄屋罷出、右々左之通郡令所御達相成付御尋として

今度制度取調子ニ付御用有之由、物成衆中々左之凡例之通来ル八日迄之内差出相成付様其筋を被相達置得共、猶又右調子合村々給庄屋共々も右日限中役筋差出付様其筋相達可申者也<sup>(11)</sup>

維新政府の領知高取調の政策が具体化されているが、その書類提出で知行地の給庄屋が鍋島市佑宅に来宅し相談している。その結果、八月十五日に知行地の年貢収納の状況について報告している。

今般御変革ニ付而左之通ニ由司籍所へ被差出付、録事石井精助殿迄白井次郎兵衛致持参付事とある。

地方知行制の廃止に引き続いて禄制改革は大きな打撃を上級家臣に与えた。禄制改革では、禄高の十分の一度しか与えられなくなったことから経済的に行き詰まりざるをえない事態をきたした。家政日記には、この間のことについては何も記されていないが、大きな影響を禄制改革によって蒙ったことは、家政改革を実施せざるえなかったことに現われている。その内容も召抱えていた家中の整理と給禄の削減が重点になっている。

八月九日の日記には、次のように記されている。

一 今般御上御改革ニ付御屋敷ニも先以左之通御改革被遊ハ

一 御家中之儀、段々大御変革相成追々ニも俸祿も格別被相減ハ趣相聞ハニ付、自分之儀左之通令改革ハ

一 是迄家来之内老分馬廻りと格式相立居ハ得とも、已来相廃し都而被官と相唱ハ様

一 是迄之切米部渡一切相省、勤之時ニ月割を以当弁可申付事

一 扶持方相省ハ事

一 被官之内ハ人柄次第席順ニ不拘屋敷詰頭其外可申付事

一 代官檢者之儀、地行上リハへも不用之儀ニ付相止ハ事

一 年々積リ方之儀相止ハ、御年間ホ詰頭として小性手伝を以無間違様念入取調子可申事

一 被官若手之内ハ稽古ホ申付儀も可有之事

一 被官初面談之節も進上拝領共扇子料たるべし

一 嚴福寺其外仕法銀米之儀、地行上リ外共被官中旦元地之百姓共馬代其外備用之儀も差支候訳も有之間敷ニ付

打追之通可然事

一 右仕法銀米之儀、城原ハ又左衛門・伝左衛門、下津毛ハ金右衛門・甚五左衛門立会ニ而出入相整、左ハ而毎

年正月欵三月ニ出入目安差出ハ様之事

但本文受持之儀も時々依リ人柄差替可申ハ間、其節も速ニ行送り可申事

一 前条受持之者ハ手許銀其外拝借之向ニ返納無疎様心遣可申事

右之外追々相違ハ儀も可有之、廉々之内重立ハ儀も急速一統致承知ハ通取計可有之事

巳八月

鍋島市佑の家政改革が示されている。これも藩改革に対応したものであることは「今般御改革ニ付御屋敷ニも先

以左之通御改革<sup>(12)</sup>とあることから窺える。家政改革の基軸は給禄関係におかれている。藩の知行削減措置がとられたとして給禄の削減を行っている。老令・馬廻りの格式を廃止し、これらを被官に統一している。格式の統一化が計られていおり、身分制の整理が進められている。また、切米もこれまでは数回に分けて支給されていたが、この切米支給を止めて出勤した日数のみの支給ということにしている。これにに応じて扶持米の支給も停止するようになった。地方知行制との関連では「地上りいへも」としているように、藩に知行地が集中され、地方知行制が廃止になったことが現われている。このため、知行地に係わってきた代官や検者は不用になったので廃止するとある。知行地との係わりは基本的に取り止められるようになっていく。ただし、被官や百姓が馬代金その他のための資金として運営してきた仕法銀米は取り止めにしては差支えが出るとして、存続させ、仕法銀米係りを城原村と下津毛村に設けている。これよりすると、地方知行制の廃止によって、年貢米徴収などの係りは直接的にはなくなったが、仕法銀米制では繋りが持たれる状況にある。

地方知行制の廃止による影響が八月に入ってから出ている。知行地を藩が統轄し、その地の年貢を藩が収納するようになるのを「上り地」と佐賀藩では称したが、「地上りいへも」という表現が八月九日の日記にみられるように、知行地廃止によって家政改革を余儀なくされ、それが今回の措置になっていることが窺われる。年貢関係は従来の繋りが断たれ、ただ仕法銀で結びつきが保たれるという状態になっている。

鍋島市佑家も藩政改革による影響を受けており、なかでも、地方知行制の廃止による痛手は大きかったとみれる。地方知行制が廃止になったことから、次のような問題も出ている。それは川支配に関する事で、次のような手覚を藩政府に提出している。

城原川之儀我々先祖由緒有之由ニ而是迄二百年來運上相納致支配來い付、此節知行之儀も差上い得共、右川之儀も打追運上相納受川ニ被仰付置い道も有御座間敷哉、此段相伺い<sup>(13)</sup>

川支配に関する問題で、知行地が廃止になったことから、これがどうなるかという事項であつた。知行地にあつた城原川は運上を納め、それによつて川支配をしてきたが、これ迄と同じように運上を納めれば川支配は継続できるかという伺いとなつてゐる。この伺いに対しては「右も伺も不相及打追御支配被成ひ様と司籍録事石井清介殿方演達相成ひ事<sup>(14)</sup>」とある。河川管轄権は鍋島市佑に保持されるという見解である。版籍奉還の結果「土地人民も不及申、御金庫并御收納筋之儀一切於政府取斗ひ様」と請役所が二月に出した「達」の解釈で問題になるのが河川は除外されるのかということである。今回の措置は、土地人民一切の藩政府への統轄ということ関連して問題を残すものであつたし、版籍奉還の承認と藩知事制施行という新しい段階では、更に複雑な内容であつたが、藩政府司籍所は旧来の慣行を簡単に認めている。河川支配権は従来は運上の上納ということで与えられてきたことが窺えるが、土地人民の政府への集中という中であつて、河川支配権をどうみるかという問題が残されることになつてゐる。司籍所は従来<sup>(15)</sup>の慣行を認めているが、これは水利権とも係わることであり、水利紛争の折には知行主がどのような対応をとるかという問題も介在することになるが、この折には、これらは深く考慮されていまいようである。

地方知行制の廃止と禄高削減によつて、鍋島市佑は経済的には従来<sup>(16)</sup>の体制を維持できなくなつた。そこで、家政改革を行うようになり、その一端として家中の縮少に着手した。

九月二日には

此節御知行御差上ニ付、御内輪之儀も格別御減略之御仕与被相立ひ付、西川十三郎婦美御暇ニ而罷越ひ、是迄御仲間同様ニ而罷在ひ砥川米助ニも差返シひ事<sup>(17)</sup>

と知行差上げとなつたので、「内輪之儀も格別御減略」として三人を減員している。知行削減が家政にも大きく影響していることが現われている。知行の削減が大きく作用していることは、

今般御知行をも御差上一口差上相成御頂戴之御石数をも半高斗ニ相成趣ニ付、御家之儀只今半分ニ相成ひ通御取

除相成ひ筈ニ付、先以御書院、御式台、御鍵ノ間迄取除ひ様被仰出ひ付、今日方家造方四人招呼ひ而瓦ホ取除ひ事(16)とあることから判明する。地方知行地を差上げたのに加えて、知行高も半高ほどになったので、家もそれに応じて半分に改造するとして、書院、武台、鍵之間を解体するために職人四人を呼び寄せている。

知行削減が大きな打撃を与えていることが家屋の一部解体ということまでになっている。知行削減の深刻な影響をここに見い出すことができる。この家屋一部解体は進行している。

九月六日の日記には

御書院葺茅剝方として城原村家婦美、要蔵、同新蔵今日参り外事

とある。家屋の解体を進めているのが分かる。七日にも「家造方八人参り事」とあり、八日にも「家造方八人参り外事、且神埼大工恵七・伝助罷出ひ、右も所々しつらい所有之ひ付」とあり、引き続き解体作業を進めている。九日にもほぼ同様のことが記されている。十三日には「御書院、御式台、御鍵ノ間迄、除方仕廻り事」とあり、家屋の一部解体が終っている。

家屋の一部解体が禄高の半減によつて進められている。禄高に相応する家屋という觀念の下にこの作業になったとみれるのは「御家之儀只今半分ニ相成ひ通御取除相成ひ筈ニ付」という言及にみられよう。生計のために止むえない措置であるとしても、解体を急に行つた背景には、このような意識があつたと解される。旧上級家臣の中でも家屋解体が進められている。(17)

このような状況下において、鍋島市佑の拠り所であつた軍事局と大隊の様相について検討しておこう。

大隊を編成して東京に赴いたが、帰領後もこの軍制は保持されているようであろう。六月二十五日には

今日副大隊長・伝令其外申合内与方後凌旁每日出府有之筈之處差合彼是ニ而四人出席相成、陣八ニ付懸合差出ひ

事



とあり、副大隊長や伝令など四人が会合している。

軍制も大隊制が施行されるようになったとみられ、

幹一郎、孫四郎様、孫六郎様、守五郎様、大隊長被蒙仰い由也

とあり、大隊長の任命が行われている。しかし、これは必ずしも順調に進展していたようでもなく、

今月守五郎様大隊長御断之願書政府御持出御頼相成い付、御登城

とあり、大隊長辞退で鍋島市佑に依頼している。この間の消息は不明であるが、軍事体制は大隊長を中心に保持されているようで、七月二十日には

副大隊長、伝令、輜重方、小司令其外御寄合ニ付、拾七人出席相成い

とあり、隊内の寄合が行われている。更には七月二十四日について

今月旦那様御事副大隊長、伝令方其外川上迄御道乗被遊候思召ニい処、天氣思和敷無之ニ付御見合被成い、尤小司令方四、五人も道乗被致い事

と隊の連繋が維持されているような動きがみられる。

八月一日の日記には

左之通御書付参りいニ付達帳ニ成い

兵隊御編成ニ付、左之通被仰付之旨仰出い

一大組頭被免い事

一組内被廃い事

軍制改革が進められ、大組体制が廃止されている。鍋島市佑も「与」体制がなくなつたことから大組頭職を解かれている。

このような軍制改革がありながらも、軍事訓練は火術方を中心に進められている。

八月二日に

御火術方被遊御出席、然処四ツ頃政府より御用申来、付同所より直ニ御登城被遊

とあり、七月二十七日に「来月二日より御火術方稽古相初より付、旦那様も御出席被遊付」とあるように、八月二日から火術方の稽古が予定されていたために、鍋島市佑も参加することから火術方への出勤が多くなっていると思われる。八月四日には

今月六ツ半頃より御火術方御出席、七ツ比御帰り、尤副大隊長始十人斗り延命院ニ而御参会、夜五ツ頃御帰之事とあり、火術方の訓練には大隊も参加しているとみれる。

大組制の廃止によって大隊編成が基軸になったとみれるが、大隊についての藩知事の関兵が行われている。

(八月十四日)(鍋島直正)  
今日正四位様於陸軍局一番大隊より二番大隊迄大砲其他被遊御上覧付、旦那様も明ヶ六ツ時比より彼地被遊御出御

帰り懸祖道元町泉龍寺へ副大隊長、伝令、司令迄御立寄相成、御酒食被思召<sup>(18)</sup>

とあり、一番大隊、二番大隊の関兵が行われている。大隊組織が基軸になっている。

このように、大組制の廃止と大隊編成の採用が進行し、軍事組織の近代化が推進されているだけに、早くから一番大隊長であつた鍋島市佑の立場は一層強くなつたとみれる。

軍制改革によって従来の番方構成が変化し、基本的には西洋軍事組織がとられるようになったが、それに対応したものであるとして被官の排除といったことがあつた。この動きについては、九月十六日の日記には、次のように記されている。

今度兵制御改革ニ付、是迄軍役と相替ひニ付、士分以上是迄抱居ひ被官之儀相省ひ様、尤家ニ依り無拠訳筋有之ひ者且是迄呉置ひ給米ホ達出ひ様御達之趣承知仕ひ、右ニ付左ニ書載之者共儀も先祖以来致附属、其内ニも大坂

表 2 鍋島市佑召抱存続者内訳

	居 住 地	切 米		人数
		石	斗	
老 分	神埼郡城原村	14	3	1
	同 上	9		1
	同 上	8	5	1
	同 上	7		2
	三根郡下津毛村	9		2
	同 上	7	5	1
扈 從 通	神埼郡城原村	6		1
	同 上	5	1	1
	同 上	4	5	1
	同 上	4		1
	同 上	2	6	1
	同 上	2		2
	同 上	1	8	1
	同 上	1	6	1
	同 上	1	2 5	1
	同 上	1	2	2
	三根郡大津毛村	4	8 7	1
	同 上	3	5	1
	同 上	3		3
	同 上	2		2
	同 上	1	8	2
	同 上	1	7 5	1
	同 上	1	2 5	2
	同 上	1	2	2
	神埼四日町	2	5	1
	神埼郡朝日村	1	2	1
	神埼郡姉川村	1	2	2
	三根郡若野宿	1	2	1
歩 行	神埼郡城原村	1		2
	三根郡日達原宿	1		1
	三根郡下津毛村	1		1
仲 間	神埼郡城原村	1		9
	三根郡下津毛村	1		4
被 官	城下唐人町	給米なし		1
	城下紺屋町	同上		1

注「城原鍋島家日記」明治 2 年 9 月 16 日より作成

御陣、有馬御陣ホ之節戦死手負又も追腹ホ仕ゝ家筋之者も被在故、可相成ハ打追ニ召置度、尤給米給銀之儀も是迄書載之通相与置申ひとある。これによれば、兵制改革によつて従来の重要な構成員であつた被官が排除されるようになり、その対応が求められていたことが窺われる。これに対して鍋島市佑は大坂の陣や島原の陣などで戦死した者、追腹の者などの子孫も居るので簡単には排除できないとして、別紙の者については、これ迄のように召置き給銀米を与えたいとしている。継続して召置きたいとしている者は表 2 のようである。

表 2 からすると、老分、扈從通、歩行、仲間、被官という名称で召抱えていたことが分かる。給米も一四石から一斗の間になっている。老分については、次の措置をとっている。

右八人以前より内分ニ而ハ老分と唱来い得共、勿論名目之儀も相廃し申い、且又切米之内壹部半丈呉置い<sup>19</sup>

とある。老分という名称は廃止し、また、給米も従来の一〇%しか支給しないとしている。召抱え置くとしても、

実質的にはその存在意義はなくなっている。また、扈從通についても「以前より内分ニ而ハ扈從通と唱来い得共、前条同断、且又切米之内壹部半丈呉置い<sup>20</sup>」とあり、これも名称の廃止、給米九〇%削減となっている。歩行、被官についても「前条同断<sup>21</sup>」とあるので、名称は廃止されている。ただ給米については言及されていないので、従来通りの支給とみれるが、元来が一斗程度の給米なので削減するほどのことでもないゆえに放置されたのであろう。

老分、扈從通、徒行は基本的には知行地に居位している。それゆえに、知行地が軍事力構成でも大きな意義を持つていたことが窺われるが、軍制改革はこれらの者を必要としなくなった。知行地の廃止は、また、軍制面においても、それを促進させる作用をなしている。知行削減によって、給米支給にも変化がみられるが、軍制の面でも被官層の排除が進行している。

十月になると新しい局面を迎えている。十月七日の日記には

今日大隊長御断之御願書軍事局へ被差出し、尤御一類田中善左衛門様へ御持出し様御頼相成い付、御同人御持出之事<sup>22</sup>

と大隊長辞任の願い書を提出した旨を記している。一番大隊長として東京まで赴き、軍事局でも主きをなした鍋嶋市佑がこの時期において大隊長を辞任した理由は不明だが、知行制改革によって知行が削減され、家計上でも運営が困難になってきたことに一因があると考えられる。十一日には「大隊長御断之儀願之通被差免い事<sup>23</sup>」とあり、大隊長辞任願いが認められた旨を記している。

鍋嶋市佑がこれまで藩内で重きをなした要素には、軍事局の主要なメンバーであったことと一番大隊の隊長であったことに由来するが、それが大隊長辞任によって一挙に存立基盤は弱まったとみれる。しかし、経済的にはすで



に従来の支配力を維持する状況ではなかった。十月二十二日には、次のように記されている。

御名其外兼而内証向差支被罷在い処、版籍差上いニ付而も、新穀取納之儀不相叶、反的版料難渋之旨を以困米売式拝借被差出被下度、銘々願出之趣遂吟味い処、一体困米之儀被為在御趣意い御備柄ニ而容易御取替ホ被差出い筋ニ無之、尤此度右版籍差上いニ付而も、自余一般困米之儀追而何連と欸厚御讃談可相成筋ニ得共、最早古米之儀も御米操も出来兼いニ付、是迄知行所損耗之砌作版拝借被差出い楯ニベ、先以備米之内左ニ書載之石数当秋新穀備替ニベ拝借被差出儀ニい条、此段筋々可被相違い、以上

一米拾三石五斗 (鍋島市佑御名)

一同七石五斗 多久万太郎<sup>(24)</sup>

地方知行制が廃止になったので、知行地から新穀を取り納めていたことも出来なくなり、生計が難渋しているの  
で困米を拝借したいと願ひ出ている。困米は元来備米であり容易に拝借米などにするものでもないが、すでに古米  
になっていて販売用にも向かず、また、知行所損毛の折には借し出しているので、この例に依つて拝借米として貸  
付けることを認めるとして、鍋島市佑には米一三石五斗の貸付けになっている。米拝借願ひを出すことは、生計が  
従来のように円滑に行かなくなったことを反映したものであり、ここに知行削減による影響の大きさを見出すこ  
とができる。

禄制改革による禄高削減によって、鍋島市佑は経済的に行き詰まりの状況になり困込の拝借願ひまでに至つてい  
るが、この事態が大隊長辞任の背景になつていとみれる。大队长辞任と困米拝借それぞれの願ひが相前後してな  
されていることにその一端が現われていると解せられる。このことは、軍事機構が禄高削減によって、上士層によ  
つて支えられなくなったことを意味する。軍事力はこのような面から弱体化したとみなされる。藩体制の解体は、  
藩軍事機構の弱体によって促進される。維新政府は常備兵規則を制定し、多くの藩兵を整理する政策を逐行するが、

それが推進できる基盤は、鍋島市佐の動向からみて既に形成されていた。しかし、それ他面では上士層の不満の高まりでもあった。士族反乱の勃発がこのことを明示したとみれよう。

注(1) 「日記 明治二年己巳三月迄七月迄 東行方」 六月七日。

(2) 「肥前藩日誌」三号。

(3) 同右。

(4) 「日記 明治二年己巳三月迄七月迄 東行方」 五月二十九日。

(5) 同右、六月十二日。

(6) 同右、六月十七日。

(7) 「城原鍋島家日記」 明治二年六月一日。

(8) 同右、明治二年六月四日。

(9) 同右、明治二年六月二十日。

(10) 「日記 明治二年己巳三月迄七月迄 御東行方」 七月十一日。

(11) 「城原鍋島家日記」 明治二年八月六日。

(12) 同右、明治二年八月九日。

(13) 同右、明治二年八月二十二日。

(14) 同右。

(15) 同右、明治二年九月二日。

(16) 同右。

(17) 同右。

(18) 同右、明治二年八月十四日。

(19) 同右、明治二年九月十六日。

(20) 同右。

(21) 同右。

(22) 同右、明治二年十月七日。



(23) 同右、明治二年十月十一日。

(24) 同右、明治二年十月二十二日。

#### 四 むすびにかえて

佐賀藩の明治二年における状況を検討するために、鍋島市佑の動向を考察してきた。着座の家柄として佐賀藩では重きをなしてきた城原鍋島家の本家として、鍋島市佑は大組頭などを勤めていたが、戊辰戦争には出軍せず領内に留まっていた。

維新政府の打ち出す改革政策とそれをめぐる藩内の動きは複雑な様相を呈した。薩長に遅れをとったという意識が領政改革の気運を高め、それは戊辰戦争従軍者の帰領によって拍車がかかった。改革をめぐって多くの対立が生まれ、それは鍋島直正の帰藩を要する事態にまでなったが、帰藩後の取り組みによって藩治規約がまとめられる。

明治二年におけるこの段階までにおいて、鍋島市佑には大きな変動は及んでいない。大組頭として「与」を統轄し、知行地との繋りも従来と余り変っていない。それが四月に東京への出軍ということで大きく変化している。「与」制度と異なった大隊編成の隊長となり、藩政府軍事局の主要メンバーに就任した。それは鍋島市佑の藩内での存在基盤を強めることに作用したが、他面では、上士層が藩政の基軸となる体制にあることを示すものであった。藩治規約による改革によって、鍋島市佑は藩政の要職に就き軍事部門を統轄した。しかし、知行地は存続して従来の繋がりも余り変化していなかった。藩治規約体制という第一段階においては、軍事組織以外では変化は顕著に現われていない。ところが、版籍奉還を上級家臣層が申し出で、それが藩政府によって認められるという事態になり、更には藩知事体制下になると大きく転換した。この第二段階における諸改革の中でも、地方知行地の廃止と禄高削減は

大きな打撃を鍋島市正に与えている。これらによつて経済的に行き詰まり拝借米を願ひ出ざるをえないまでになり、それは大隊長辞任という事態に及んでいる。このような事態になる政策は主に維新政府が推進したものであった。

維新政府の政策は多くの対立と混乱を領内で伴いながらも基本的には逐行されていた。薩長に遅れをとつたという藩閥意識が政策推進の要素を担つたが、それは藩内では上中士層の没落を促進させるものであった。藩初以来存続してきた地方知行制が版籍奉還の推進ということで廃止され、佐賀藩主鍋島直大に対する版籍奉還の承認と藩知事への任命という時期までには、すでに土地人民の藩への集中という政策は打ち出されていた。しかし、事態においては、藩知事制下においても八月初め頃までは知行地としての機能は維持されていた。それが維新政府の「藩制」の諮問という事態になり、藩内で検討され、その趣旨に沿つた方向で政策が出されるに及んで大きく転換した。知行地を統治することは出来なくなり、禄制改革によつて禄高は大きく削減され、経済的困窮に追いやれた。これらからすると、第二段階つまり藩知事体制下での諸改革によつて大きな変動を鍋島市佑は受けている。ここに藩知事制ということが大きな作用をもたらしたことが窺える。藩体制の解体上において、藩知事制施行の意義がここにある。維新政府の官僚機構の一環として組み込まれた藩知事は、また、維新政府の政策推進者たらざるを得ない立場に置かれた。改革推進派はそれによつて藩内で改革を一層促進しやすくなったが、それは藩内矛盾の激化でもあり、江藤新平が佐賀藩卒によつて明治二年十二月二十日に襲撃されるという事態はその顕在化を示すものとなつた。

維新政府の権力基盤ということからすれば、鍋島市佑のような上士層はその基盤にはなりえない状況にあることが、鍋島市佑の動向から窺うことができる。また、卒族でもないことは、改革が卒族との矛盾を深めたことから裏付けられる。旧来の体制を乗り越えた開明的人材が求められた所以であるが、それはまた世直し層に対決する人物であつた。戊辰戦争後、維新政府にとつて対処しなければならぬ課題に士族問題と世直し騒動があつたが、前者については、鍋島市佑の動向からして、その抵抗の基盤は弱体化しつつあつたことが窺える。廃藩の過程は藩知

事体制下において、その実態が強まったとみれる。ここに藩知事制の役割を見い出すことができよう。